

## 「綿密めんみつなる宗風しゅうふう」の實踐

本山単頭 柴田 康裕

毎年、お歳暮の時期を迎えますと、長野県で果樹園を営んでおられる檀信徒の方から、おいしいリンゴをいただきます。甘い蜜がたっぷり入ったリンゴを、段ボールでひと箱も贈ってくださるのです。今年は10月に来襲した台風の被害により、いつもの年より品質が悪いということでしたが、それでも立派に実ったリンゴを、いつものようにご本堂へお供えしてから、みんなでいただきました。

ところで、数年前になりますが、ある方から、リンゴを仏さまにお供えする時、そのままお出しするのではなく、皮をむいて一口サイズに切ってから、それをお皿にのせて、楊枝をそえて差し上げるといったように、他人様に差し出すようにお供えする心くばりが大切であると教えられたことがございます。なるほど、自分たちがご馳走になる際には、時には丸かじりすることもございますが、ほとんどの場合は、ちゃんと皮をむいて、一口サイズに切ってからいただくことが多いように思います。仏さまにお供えをする時にも、そのような親切さを忘れてはならないということです。

今年、百回御遠忌を迎えられた、本山獨住第四世・石川素童禅師さまは、そのご著書の中で、「曹洞宗しゅうふうの宗風いかに如何と問えば、唯是れ綿密めんみつのみと答ふるのである」とおっしゃっておられます。そして、その「綿密」とは「如何なることでも、慎重しんちょうに、丁寧ていねいに、大切たいせつにすることである」とお示しになっておられます。例えば、廊下の雑巾がけをする時も、庭の落ち葉掃きをする時も、いつも慎重に、丁寧に、大切に修行することを忘れず、決して気をぬいてはならないということです。仏さまにお供えする時のちょっとした心くばりも、この「綿密なる宗風」の實踐に通ずるものがございます。

日常生活の中で、いつもまごころを込めて行うということを通して、禅師さまのみ教えの實踐に、ともに勤めてまいりたいと思います。